展覧会「繭の記号論: 技術をめぐる倫理・芸術・哲学」

◉日時 2025年7月5日（土）・6日（日）
展示コアタイム
7月5日　10:00-15:00, 17:30-20:00
7月6日　9:30-13:40, 18:00-19:00
※企画セッション開催時間をのぞく. 詳しくは大会特設Webページ（https://www.jassweb.jp/45taikai）をご覧ください。

◉場所　情報科学芸術大学院大学（ソフトピアセンタービル3F・4F）
◉無料（※学会に参加する場合は要学会参加費）
◉クレジット
主催: 日本記号学会
企画: 大久保美紀（日本記号学会第45回大会　実行委員長）
助成: 公益財団法人吉野石膏美術振興財団、公益財団法人ポーラ美術振興財団
協力:　情報科学芸術大学院大学、art-sensibilisation、IAMASプロジェクト「テクノロジーの〈解釈学〉」

◉参加作家: 石橋友也, 上松大輝+水島久光+椋本輔, 杉浦今日子, 瀧健太郎, 西脇直毅, 林晃世, 平瀬ミキ, 福島あつし, 藤幡正樹, 宮沢らも, Jean-Louis BOISSIER, florian gadenne + miki okubo, Yukichi INOUÉ, IAMAS学生有志（兒島朋笑、中岡孝太、中村駿）

◉関連イベント
平塚弥生による「共食ワークショップ」7月5日17:30-18:00

◉問い合わせ　大久保美紀（日本記号学会第45回大会実行委員長）mk_(@)iamas.ac.jp

◉出展作家と展示作品
展覧会「IAMAS ARTIST FILE #10 繭／COCOON: 技術から思考するエコロジー」より
石橋友也
1990年生。2023 年 IAMAS 博士後期課程入学。大学では生物学を学ぶ。現代的な科学やテクノロジーの視点から、品種改良種や人工知能、文字などの自然と人為の境界に位置する対象の性質、構造、来歴に迫る実践を行う。2012 年より早稲田大学生命美学プラットフォーム“metaPhorest”に所属。現在は生物学にまつわる芸術の研究と制作を行う。主な受賞に文化庁メディア芸術祭優秀賞（2021）、第 25回岡本太郎現代芸術賞入選（2022）など。 人類が 1700 年かけて愛玩用に造形してきた金魚を祖先であるフナの姿に戻す、都市や森のランドスケープのなかに見出される言語の幾何学的パターンを人工知能によって再認する、川で拾得した廃棄物から制作した顕微鏡を用いて川の有機的環境を覗き見る、石橋のこれらのアプローチは、わたしたち人間とそれを取り巻く環境との関係や、わたしたちが世界を生きる手段である技術について、思考を再構築するよう挑発する。品種改良によって作られた種は自然の一部たり得るのか、人工物と自然物のあいだに本質的な差異はあるのか、〈ものを作る〉とはいかなる営為なのかを問う。
　i-1《金魚解放運動》(2012-17年, 2024年改作）ヴィデオ（5:33）、家系図

i-2《バベルのランドスケープ》（2023年-）独自アルゴリズム処理によるヴィデオ（11:04,新倉健人、吉田竜二との共作）
i-3《Self-reference microscope》（2025年）ヴィデオ（5:25）、川で採取した自然物や廃棄物
i-4《神田上水顕微鏡》（2025年）ヴィデオ（2:07）、自転車、カメラレンズ、iPhone、鉄くず・コンクリート・鉱物の複合物、神田川の水
※場所: ギャラリー2

西脇直毅
1977年生。2007 年 IAMAS 修了。ネコや縄目の文様が無限に増殖し画面を埋め尽くすような、精緻な作品に取り組む。国際芸術コンペティション「アートオリンピア」審査員特別賞（建畠哲）受賞（2015）。個展に「超絶のボールペン画無数のネコたち」（天満屋岡山本店・福山店、2020）、「意気猫々」（ギャルリー宮脇、京都、2021）、吉村大星との二人展に「ミクロの猫と巨大な猫」（瀬戸内市立美術館、2020）など。国際交流基金海外巡回展「超絶技巧の日本」出品中（2018-）。 西脇直毅の絵画世界では、微小なネコが増殖し、数えきれないほど集まって流れを成す。ネコは異なる動物と出会い、あるときは渦を巻き青海波のような文様と有機的に接続しながら、紙面を埋め尽くす。こうしたアクションは、人類の伝統的な表現としての「文様」の生成になぞらえることができる。彼の表す文様は特定の意味を帯びた単なる装飾ではない。2024 年から新しく取り組む《刺青の女》シリーズでは、西脇は使い慣れたボールペンのグリップを離れ、液晶タブレットとペンを用いてデジタルの皮膚に文様をほどこす。 「文身」（イレズミ）が身体を世界から聖別するものであったように、現代のテクノロジーを通じて描かれる西脇の文様もまた、世界の裂け目を垣間見せる「わざ」である。
n-1《刺青の女１》（2024年）半光沢フォトペーパーにインクジェットプリント
n-2《山、ネコ、さかな》（2023年）ケント紙にボールペン、カラーボールペン、色鉛筆
n-3《赤色のへびとネコ》（2023年）ケント紙にボールペン、カラーボールペン
n-4《猫文尽くし》（2012年）画用紙にボールペン
※場所: ギャラリー１

florian gadenne + miki okubo
美術家のフロリアン・ガデン（1987年生）と、美学・芸術学を研究領域とする IAMAS准教授の大久保美紀（1984年生）によるユニット。生態系の複雑性に着目し、エコロジー問題に対峙する表現活動を続ける。第 10 回 500m 美術館賞グランプリ賞（2023）、清流の国ぎふ芸術祭Art Award in the CUBE 2023 入選。ガデンは第27 回岡本太郎現代芸術賞特別賞受賞（2024）、大久保は西枝財団 2024 年度「瑞雲庵における若手創造者支援プログラム」に採択され、展覧会「遍在、不死、メタモルフォーゼ」を企画。 ガデンと大久保は、自身を取り巻く世界との関係を新しく結び直すための糸口を模索する。非人間存在との関係を再考するブリュノ・ラトゥール、技術の人間固有性から脱却するエマヌエーレ・コッチャ、木々を見る慣習的な視点を覆すフランシス・アレを参照しながら、エコロジー問題への対峙を軸に、日常を新しく生きる芸術的アプローチを追究する。その試みは、生態系の自生に関する実験的な生物彫刻、生の関係性としての「食」をめぐる表現、生態系における複雑な関係性を多角的に再構成した絵画作品として展開されてきた。 本展では木々の世界をめぐるインスタレーションに取り組み、わたしたちと非人間存在の「生きるための技術」を思考する。
go-1『L’Arbre-Monde』のためのイラストレーションより抜粋（2024年）紙に墨、水彩絵具、ガッシュ
go-2《Le Chêne Monde》（2022年）紙に墨、水彩絵具、ガッシュ
go-3《Gland Monde》（2024年）磁土、イラストレーション抜粋
※場所: ギャラリー１

Jean-Louis BOISSIER
1945年生、パリ第 8 大学名誉教授。1980 年代からメディアアートの分野で、アーティスト、研究者、キュレーターとして活動。1997 年に IAMAS で実施したワークショップをはじめとし、IAMAS 教員や学生と数多くの協働歴がある。ルソーの著作の解釈やモノの生と記憶を扱う作品を制作。主著に『L'écran comme mobile』（2016）など。
アートにインタラクティブ性を導入した先駆者の一人として、80 年代以降に普及したニューメディアを手段に新たな芸術体験を追求してきた。本展では「蕎麦猪口」という日本

的な器について、その文化性・芸術性・技術性を問うプロジェクト《(digital) Soba Choko》の研究成果を展示する。
タイトルの「digital」は「数」と「指」に関わる両義的な意味をもつ。本作は、このオブジェが伝統的に人々の手技による陶器として作られると同時に、その截頭錐体(せっとうすいたい)の寸法が安定した比率（高さ:底辺:幅＝6:6:8）をもつことに着目する。わたしたちが「技術」と呼ぶもの—機械技術と工芸的な技芸—は、その根源において、ものづくりにいかに関わるのか。

jlb-1《(digital) Soba Choko》より抜粋（2024年）写真、テクスト
jlb-2《Crassula ubiquiste》（1985年-）クラッスラ・オバタ（カネノナルキ）の12の鉢植え
※場所: ギャラリー1

展覧会「石に話すことを教える: 生きるという〈わざ〉」より

杉浦今日子

刺繍を中心にした工芸の技法による造形作家。東京で刺繍作家・講師として活動ののち2009年渡仏。パリ・オートクチュールの刺繍工房でトップブランドの刺繍制作を手がけつつ、その技法を自身の創作に採り入れた作品を発表する。主な展覧会に「Symbiose」(Paris,2017)、「Dialogue」(東京、2022)、「HOMO FABER」(Venice, 2024)など。技術と素材は私たち人類の歴史と文化を語る大切な証人であるとの思いから、ヨーロッパの刺繍技術の系譜を研究。新旧さまざまな技術と素材を組み合わせ、人間の手が作り出す表現の可能性を追求する。

s-1《Cocoon - blue-》（2019年）糸、花弁、銀箔
s-2《Cocoon - gold-》（2019年）糸、花弁、金箔
※場所: ギャラリー1

Yukichi INOUÉ

1942年福岡生まれ。石と向き合い、真正性、記憶する義務、謙虚さを追求する。これまでに260回以上のグループ展や個展を開催し、フランス国内外で22点の記念碑的な石の彫刻を制作。エジプト、ブルキナファソ、ベルギー、旧ユーゴスラビアで開催された国際彫刻シンポジウムに参加。2001年と2011年にパリのサロン・ド・メでクーベルタン財団賞。アカデミー・デ・ボザールP.ジアナダ財団賞。2014年アカデミー・デ・ボザール（フランス学士院）シモーネ＆チノ・デル・ドゥーカ財団より彫刻賞。ボルヴィック溶岩を使った作品を数多く制作した後、2011年以来、沖縄の石を素材に« Mille et une têtes » に取り組む。

iy-1《Mille et une tête》より4つの頭部（2012年-）琉球石灰石
※場所: ギャラリー1

特別出展作家

藤幡正樹

日本のメディア・アートのパイオニア。1996年にネットワークをテーマにした作品《Global Interior　project》で、アルス・エレクトロニカ・ゴールデンニカ受賞。2018年には香港で、また2022年にはロスアンゼルスで、歴史をテーマとした大型のARのパブリック・アート・プロジェクト《BeHere / 1942》を実現。近年、《Brave New Commons》《My First Digital Data》など、NFTを扱ったプロジェクトを展開する。
《Light on the Net》 1996年版は、財団法人ソフトピアジャパンと慶應義塾大学藤幡研究室との共同研究の成果として制作され、2002年までソフトピアジャパンセンタービルに設置され運用された。2024年版は、「岐阜おおがきビエンナーレ2017」で伊村靖子と松井茂が再展示を計画し、「清流の国ぎふ」文化祭2024を契機にIAMAS附属図書館に設置された。

f-1《Light on the Net》（1996、2024年改作）
※ https://www.lightonthe.net/, IAMAS附属図書館

平瀬ミキ
情報科学芸術大学院大学メディア表現専攻修了。主な展示に「第14回恵比寿映像祭」（2022年）など。デジタルデバイス上での情報を見る行為に素材の特性を組み合わせることで、情報の残存性や人の見ようとする力にアプローチする作品を制作する。
《氷山の一角》は、切頂四面体の形をしたオブジェ、カメラ、モニターで構成された複数の展示場所からなる作品。各モニターには、ライブ配信を介して異なる場所に設置されたオブジェを一つのものとして見せかける映像が映し出されている。今日のデジタル情報環境における情報の真偽を判断することの難しさに対し、各人がメディア越しに映し出されたものをどう見ようとするのかを問いかける。

hm-1《氷山の一角》（2018年、2024年改作）ビデオカメラ、切頂四面体、youtubeライブ配信（右のQRコードより視聴）
再展示協力: IAMASプロジェクト「テクノロジーの〈解釈学〉」オブジェ制作：丸山のどか
※場所: ギャラリー１、3階シアター前、ギャラリー3前

福島あつし
1981年、神奈川県生まれ。2004年大阪芸術大学写真学科卒業。2004年から2014年まで神奈川県川崎市で高齢者専用の弁当配達員のアルバイトをしながら配達先の老人の撮影を続ける。2019年、本書のもととなった作品（弁当isReady）にてKG＋Awardグランプリ受賞。翌年、KYOTOGRAPHIEにて同作を展示。2019年より農業従事者となり、2024年まで夏の激しい農作業を撮影。

fa-1《ぼくは独り暮らしの老人の家に弁当を運ぶ》（2021年）銀塩印画紙
fa-2《ぼくは夏の畑で生き物たちと野菜を奪い合う》（2024年）デジタルスライドショー
※場所: ギャラリー１

学会員出展者

上松大輝+水島久光+椋本輔
本作品は、「他者の視点への想像力を媒介するメディア」としてのデジタルアーカイブの可能性　を、個々の鑑賞者とのインタラクションによって生成変化していく「メタデータ」の有り様のビジュア ライズによって、示唆的に提示するものである。 本作品の制作メンバーは、デジタルアーカイブをめぐるメディア実践の共同研究に取り組んできた。その研究では、デジタルアーカイブをめぐる情報の蓄積や体系化、活用といった問題を一体　で、総合的なコミュニケーションのプロセスとして捉えている。アーカイブのテーマが、具体的な地域や生活といったローカルなレベルにある場合や、「戦争関連資料」といった複雑な意味論的性質をもつ場合には、特に顕著にそれらの問題が、総合的かつ再帰的なコミュニケーションのプロセスとして浮かび上がってくる。そこでは、デジタルアーカイブにおいて個々の資料データを意味づけるメタデータも、静的な情報として正確性やデータ量の充実が問われるのではなく、コミュニケーションの中で動的に更新され続ける、いわば記号過程＝セミオーシスのようなイメージで捉え 直される（meta-data as semiosis）のである。

u+m+m-1《Illusionary Banyan: meta-data as semiosis》（2025年）壁面プロジェクション、タブレット端末、ローカルネットワーク、資料
※場所: 4F C411講義室

瀧健太郎
人々は、スマートフォンを手に持ちながら、都市の廃墟や倒壊した家屋の前を通り過ぎていく。彼らのような戦場のような場所で観光する人々は、インターネット情報やビジュアルニュースに過度に依存し、重要なものを失いつつある現代の私たちを象徴しているかもしれない。2016年、私はドイツのベルリンを訪れ、イーストサイド・ギャラリーで開催されたカイ・ヴィーデンホーファーがシリアの戦場を撮影したドキュメンタリー写真展「War　on Wall」を鑑賞した。ヴィーデンホーファーはベルリンの壁に直接写真を貼り付け、その壁の前で観客と共に展覧会を記録した。ヴィーデンホーファーは、この映像作品の使用を快く許可してくれた。

t-1《ダーク・ツーリズム》（2016年）シングル・チャンネル（7:33）
※場所: 4F

林晃世
心拍センサーなどを用いた現代的な生体情報端末では捨象されてしまう、呼吸よりもゆっくりとした長周期の血行動態を自作の映像処理アルゴリズムで可視化する。取り出された足の裏全体の血行動態をガムランの数字譜に変換し、演奏する。血流を提供する者は、数字譜とは別の楽譜に従い呼吸することで、血流が変化し数字譜の生成に影響を与える。
h-1《足の裏ガムラン》（2025）ガムランセット（ペロッグ）、演奏者（マルガサリ＋IAMASガムラン部＋α）、血流可視化&数字譜生成装置
※場所: 4F C403コンピューター室

宮沢らも
この楽器を制作しようと思ったきっかけは、自身の作曲した楽曲「ルリホコリの夢」のための楽器があったらいいな、という思いからだった。楽器の見た目は、楽曲のタイトルにもある「ルリホコリ」という粘菌をモチーフにデザインしている。木琴のように演奏でき、また24平均律を用いているため、ピアノの半音より狭い音程を鳴らすことができる。モチーフと楽曲、楽器の関係性には代わりがなく、「かけがえのない楽器」をバーチャル空間で実現することを試みた。
m-1《ルリホコリの夢ーバーチャル楽器》（2024年）２台のモニター、PC
※場所: 4F C411講義室

IAMAS学生有志

兒島朋笑
本作は、声の参与を伴うサウンドインスタレーションである。鑑賞者は、スマートフォンを介した対話によって作品に参加することができる。この対話の内容が録音され、インスタレーションのサウンドとして出力されることによって、参加者の声が作品を構成する。
つまり、本作において鑑賞者が参加するごとに作品が変容するその様は、「他者」によって自己が変容することの追体験である。
k-1《あわい｜between us》（2025年）参加型サウンドインスタレーション
※場所: 4Fエントランス

中岡孝太
生成AIと人間の協働による、新しいドキュメンタリーは可能か。この作品は、AIで生成した東京らしき映像を、人間である私が再撮影することで切り取り返した、記憶に基づくセルフドキュメンタリーである。ところで、記憶というものは過去に存在しながら、現在の自分に依存してしか掴み取ることができず、つねに変化を伴う不思議なものだ。思い違いや忘却を含みつつも、確かな「事実」として私の中にあるものを探る。
nk-1《one day ///tokyo》（2025年）ヴィデオ　（約5分）
※場所: シアター
開廊時間: 7月5日（土）13:00-15:00, 17:30-18:30、7月6日（日）11:00-13:00, 18:00-19:00

中村駿
現代では画像生成AI　やデジタル加工といった画像処理技術の一般化によって、視覚メディアの証言性が失われつつある。この状況において、身体性を伴う体験が新たに持つ固有の価値を視覚表現によって探求する。現物とデジタル・イメージの距離を視覚的に近づけることで、その間にある本質的な差異を明らかにする。present（現前）/　represent（表象）の往復を試みる。
ns-1《re-Present》（2025年）インスタレーション
※場所: ギャラリー３

作品リスト

石橋友也
i-1《金魚解放運動》(2012-17年, 2024年改作）ヴィデオ（5:33）、家系図
i-2《バベルのランドスケープ》（2023年-）独自アルゴリズム処理によるヴィデオ（11:04,新倉健人、吉田竜二との共作）
i-3《Self-reference microscope》（2025年）ヴィデオ（5:25）、川で採取した自然物や廃棄物
i-4《神田上水顕微鏡》（2025年）ヴィデオ（2:07）、自転車、カメラレンズ、iPhone、鉄くず・コンクリート・鉱物の複合物、神田川の水

上松大輝+水島久光+椋本輔
u+m+m-1
《Illusionary Banyan: meta-data as semiosis》（2025年）壁面プロジェクション、タブレット端末、ローカルネットワーク、資料

杉浦今日子
s-1《Cocoon - blue-》（2019年）糸、花弁、銀箔
s-2《Cocoon - gold-》（2019年）糸、花弁、金箔

瀧健太郎
t-1《ダーク・ツーリズム》（2016年）シングル・チャンネル（7:33）

西脇直毅
n-1《刺青の女１》（2024年）半光沢フォトペーパーにインクジェットプリント
n-2《山、ネコ、さかな》（2023年）ケント紙にボールペン、カラーボールペン、色鉛筆
n-3《赤色のへびとネコ》（2023年）ケント紙にボールペン、カラーボールペン
n-4《猫文尽くし》（2012年）画用紙にボールペン

林晃世
h-1《足の裏ガムラン》（2025）ガムランセット（スレンドロ）、演奏者（マルガサリ＋IAMASガムラン部＋α）、血流可視化&数字譜生成装置

平瀬ミキ
hm-1《氷山の一角》（2018年、2024年改作）ビデオカメラ、切頂四面体、youtubeライブ配信
再展示協力: IAMASプロジェクト「テクノロジーの〈解釈学〉」オブジェ制作：丸山のどか

福島あつし
fa-1《ぼくは独り暮らしの老人の家に弁当を運ぶ》より抜粋（2021年）銀塩印画紙
fa-2《ぼくは夏の畑で生き物たちと野菜を奪い合う》（2024年）デジタルスライドショー

藤幡正樹
f-1《Light on the Net》（1996、2024年改作）※IAMAS図書館に設置

宮沢らも
m-1《ルリホコリの夢ーバーチャル楽器》（2024年）２台のモニター、PC

Jean-Louis BOISSIER
jlb-1《(digital) Soba Choko》より抜粋（2024年）（写真、テクスト）
jlb-2《Crassula ubiquiste》（1985年-）クラッスラ・オバタ（カネノナルキ）の12の鉢植え

florian gadenne + miki okubo
go-1『L'Arbre-Monde』のためのイラストレーションより抜粋（2024年）紙に墨、水彩絵具、ガッシュ
go-2《Le Chêne Monde》（2022年）紙に墨、水彩絵具、ガッシュ
go-3《Gland Monde》（2024年）磁土、イラストレーション抜粋

Yukichi INOUÉ
iy-1《Mille et une tête》より4つの頭部（2012年-）琉球石灰石

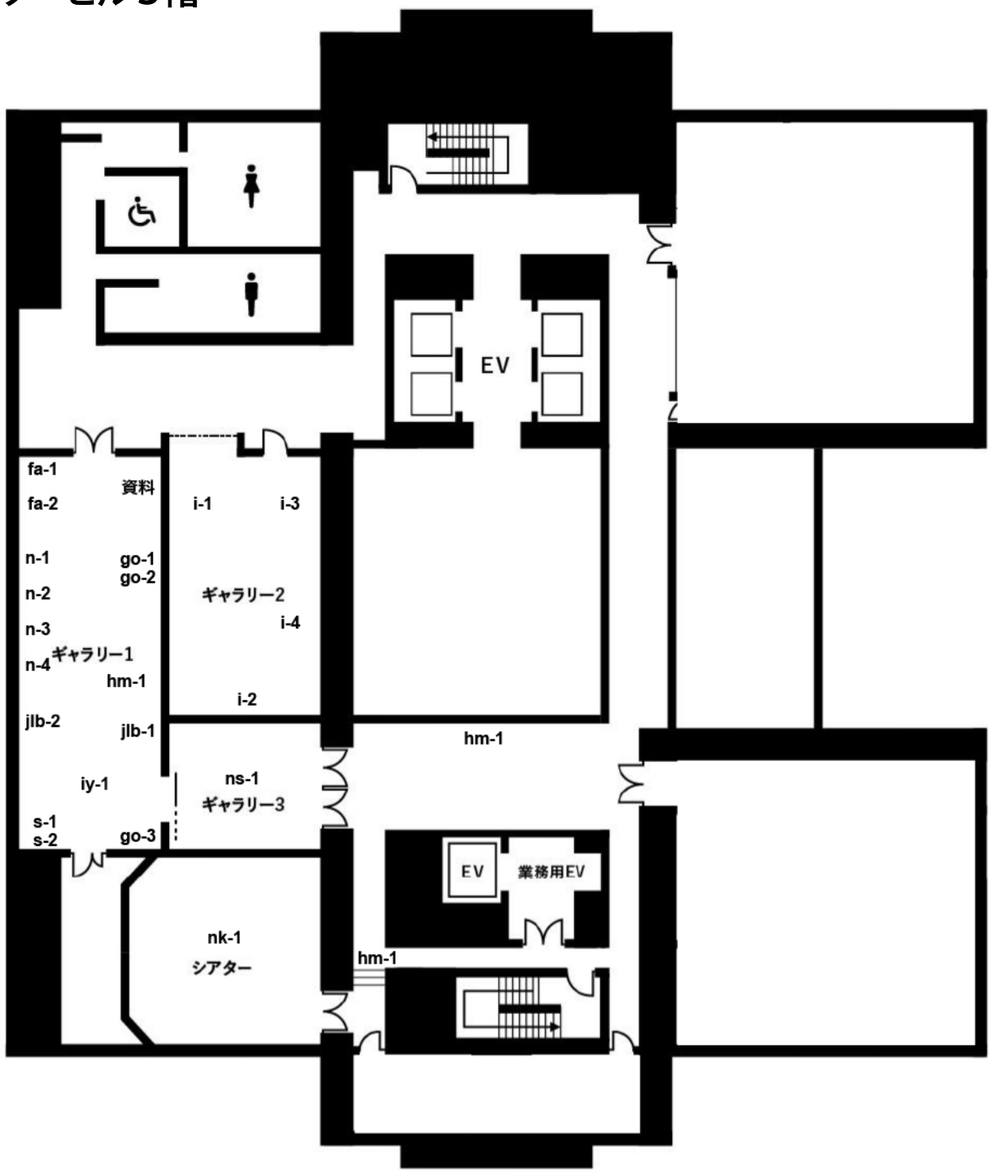
IAMAS学生有志

兒島朋笑
k-1《あわい｜between us》（2025年）参加型サウンドインスタレーション

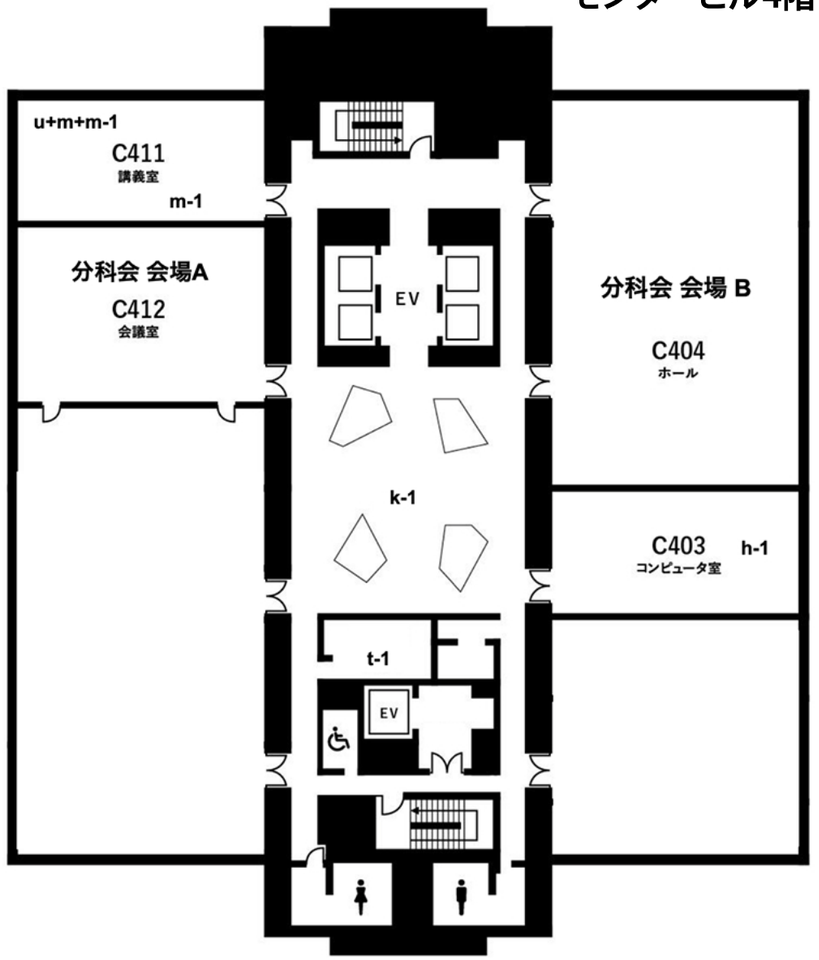
中岡孝太
nk-1《one day ///tokyo》（2025年）ヴィデオ（約5分 ）

中村駿
ns-1《re-Present》（2025年）インスタレーション

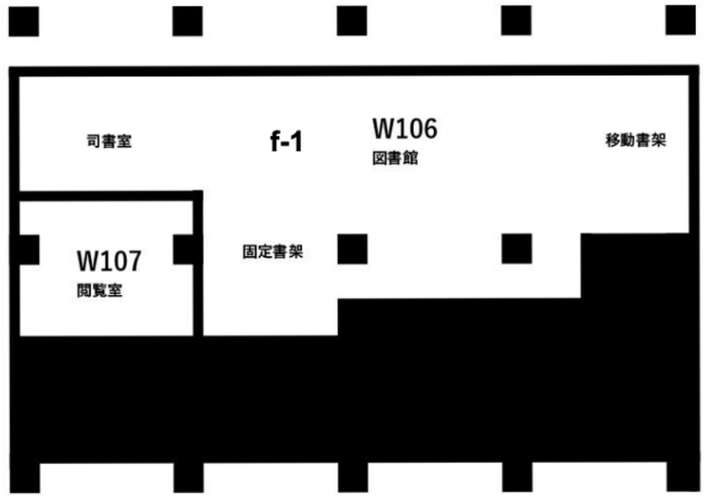
センタービル３階



センタービル4階



ワークショップ1階



展覧会「繭の記号論」
詳しくはこちらをご覧ください→